



Title	海から寄り来るもの-伊雑宮御田植祭の神話世界-
Author(s)	堂野前, 彰子
Citation	古代学研究所紀要, 8: (1)-(8)
URL	http://hdl.handle.net/10291/14769
Rights	
Issue Date	2009-02-28
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

海から寄り来るもの

―伊雑宮御田植祭の神話世界―

祭とは、秘儀となくなつたならば複合化され重層化される運命にあるものである。共同体内部で行われる秘儀である間、その祭祀は外部によつて犯されることなく本来の姿そのままをとどめているのだが、一端その祭が広く開かれたものとなつた時、祭祀の新たな解釈が進み、本来の意義・目的に別のものが付加されて、祭祀そのものが大きく変わってしまうこともある。祭祀の複合化重層化は、共同体が外部との接触を持ち、外に開かれたものとなつてしまつたなら致し方ないことなのであろう。

ここで取りあげる伊雑宮御田植祭は、後の時代になつて祭祀の融合がなされ、現在のような形式になつたと思われる。「竹取神事」「田植え神事」「踊り込み」と呼ばれる神事は、本来はそれぞれ奉仕する集団もその神事の意味するところも異なつていて、かつては別々のものであつたに違いない。

調査を終えて三ヶ月が過ぎた今、その時の様子を振り返りながら、神事それ

堂野前 彰子

ぞれの意味と伊雑宮とりまく周辺の地理的環境や事情を考えると、太古の昔に通じる祭祀の本質は失われずにいるように感じられる。祭祀が融合し複合化したといつても、神事に神事が重ねられて重層化したといつても、その本質が変わつてしまつたわけではない。むしろより濃厚に、派生的にその発生の動機を語るようになったと思われる。むしろより鮮明に、祭は始原の時、「昔」を語っているのではないか。神事一つ一つでは語りえない物語を、重層化されたことによつて紡ぎだしているように思われてならない。祭はまさに「神話」の再現としてある。

御田植祭の概要に沿つて思考を深めながら、その深層にねむる祭祀発生の動機に迫つてみたいと思う。

志摩市磯辺町にある伊勢神宮別宮伊雑宮〔1〕では、毎年六月二十四日に御田

植祭が行われている。この御田植神事は平安後期に始まるとされるが、信憑性の高い記録としては一二八〇年の文書が初出である。一八七一年の廃藩置県によって全ての料田が国有化されたため翌七二年に廃止されたが、一八八二年から虫除祈願という名目で御田植祭は再開された。どんな荒天であろうと太平洋戦争中であろうと、この十年間の中断以外で祭が行われなかったことはないという。人々にとつてこの祭がいかに大切であつたかが理解される。

二〇〇八年の御田植祭は、汗ばむほどの晴天に恵まれ、磯辺の九地域、七年に一度で持ちまわりされる今年のご奉仕当番は、恵利原地区だつた²⁾。

祭は朝八時半頃、えぶり役が七度半の使いにたつところから始まる。えぶり役が正殿に拝み、稲を一把ずつ供えるその側で、近隣の海女による豊漁と安全の祈願がなされている。この祭が単に農耕神事であるだけではないことがよくわかる。この祭は漁撈民によつても支えられている。七度半の使いの儀礼が終わると、えぶり役を初め、早乙女、田道人、ささらすり(棒の中央に刻み目を入れ、それを左手にもつたささらでこすり音を出す)、太鼓打、大鼓、小鼓、笛方、謡い方といった奉仕者は神官によるお祓いをうけ、作長は田に植える早苗を受け取る。

一方、料田では田植えの前に「竹取神事」が行われる。畦に立てられた青竹の先端には大きなうちわのような形をしたサシバ(ゴンパウチワともいう)が取り付けられており、その竹は三度扇がれて田の中に倒される。その時、裸の漁師たちが田の中にはいり、竹を奪いあつて豊漁を祈願する。その竹を持ち帰って御符として船霊に祀つたならば、漁業繁昌・海上安全が約束されるらしい。

この「竹取神事」で男たちが乱暴に踏み荒らしたことによって、田には生命が吹き込まれる。さらに、空中高くあつた太陽はサシバに扇がれて招き寄せられ、サシバとともに田に落ちて、稲刈りが終わるまでの期間、田に宿ることになる。サシバによつて招かれたのは太陽に象徴される豊漁なのである。

その後、太陽が田の神と変じたその田で「田植え神事」は行われる。早乙女たちによつて田植えがなされる間、大鼓・小鼓、笛方、謡い方、ささらすりによつて歌舞がなされる。太鼓打ちは田に浮べられた小さな田船(稲船)の上で太鼓を叩くのだが、これは十歳前後の男の子が女装していて、アマテラスを模しているのだという。

アマテラスが女装した男の子であることは注目に値する。なぜなら、アマテラスは神の召す衣を織る機織女として『日本書紀』では描写されているように、二十歳前後の女性が演じるならいざ知らず、女装した十歳前後の男の子が演じるということには倒立があるからだ。神は子供や老人に依り憑くものであるから子供が演じることはあるとしても、女装という偽装は何を意味するのだろうか。およそ似つかわしくないものが見立てられる時、その時空は現実を離れ始めるのではないか。田に浮かぶ船にしても、現実世界とは異なる倒立した世界を示している。船は田を海上かつ天空とみなしてしまう。水上をいくように天空をいく船が幻想されていて、ここに神話的空間が出現する。

…天照大神、天狭田・長田を以て御田としたまふ。時に素戔鳴尊、春は重播種子し、重播種子、此をば豊稔原と云ふ。且畔毀す。毀、此をば波那豆と云ふ。秋は天斑駒を放ちて、田の中に伏す。復天照大神の新嘗しめす時を見て、則ち陰に新宮に放戻る。又天照大神の、方に神衣を織りつつ、斎服殿に居しますを見て、則ち天斑駒を剥ぎて、殿の薨を穿ちて投げ納る。 …『日本書紀』

船が浮かんでいるのは地上の田なのではない。アマテラスが種を播き、その実を収穫した、高天の原にある「天狭田・長田」なのだろう。倒立した「見立て」によつてつくり出された田植えの祭祀空間は、神話と繋がる始原の時を再現し始める。

サシバに扇がれ招き寄せられた太陽が田に宿り、その田の神となった太陽神は十歳の男の子扮するアマテラスとなつて「田植え神事」を背後から見守り、その田植えを行う早乙女に田作りをするアマテラス自身の姿が重ね合わされ、苗には秋の豊かな実りをもたらす命が与えられる。現実と神話が交錯し、その非現実的時空において、稲の豊饒は予祝される。その神事は稲作の始まつた昔から続いている、太陽神による予祝儀礼なのであろう。神事根底にあるのは、稲は太陽の光を浴びてこそ成長するものだという原理である。

「田植え神事」が半分終わったところで、ささらすり二人が「早取挿」という舞踏を行う。それは「刺鳥数え唄」と呼ばれるもので^③、真名鶴がくわえてきた稲穂を歌っている。そのような中休みをはさんで田植えが終わつた後、一同は行列をつくつて料田から神社境内まで「踊り込み」を行う。わずか三百メートルの距離を三時間かけてゆつくり歩くのであるが、それは祭祀というよりは芸能に近いものである。先頭の若者たちはエブリで地面をつきながら元氣よく歌を歌い、中ほどは早乙女が菅笠を被つて静々と歩く。最後尾には田船に乗つたアマテラスとささらすりたちが続き、太鼓を打ち、ささらをならしながら舞を舞う。その時に歌われる歌詞の中にも、「千田の御池に稲穂が落ちて 神の御授けありがたや」と、真名鶴によつて稲がもたらされたという穂落とし伝承が語られている。

そもそもこの伊雑宮は「イサワノミヤ」とよみ、「伊佐波宮」とも表記され、『延喜式』では「粟嶋坐伊射波神社」^④として登場する。粟嶋にいる伊射波神の社という意味であり、この地は元々粟嶋と呼ばれていたらしい。『太宮儀式解』によれば、「伊勢粟」が訛化してイサワ（伊射波）になつたという。その「粟」が意味するのは、『日本書紀』一書に、スクナヒコナが粟茎にはじかれて常世国へ帰つていったとされる地、粟嶋である^⑤。それは、同じく『日本書紀』垂仁天皇二十五年冬の記述、「是の神風の伊勢国は、常世の浪の重浪帰する国なり」

とアマテラスが伊勢五十鈴川に鎮座した時に語つた言葉をも想起させる。この伊勢国は常世に接する国であり、伊射波神鎮座する粟嶋は、常世の波寄せる渚のことなのである。

伊雑宮の縁起は、『磯部郷土史』^⑥には、倭姫が伊勢神宮への神饌を奉納する御贄地（みにえどころ）を探すために志摩国を訪れた際、猿田彦の末裔である太田命が出迎え、伊佐波登美神をして宮を建立させたことによるとあるが、鎌倉時代に成立した『倭姫命世記』によれば、後述の引用にあるように、鳥の声に導かれて発見した、一本の根から千穂に実つた稲を伊佐波登美神に抜き穂に抜かせて献上させ、その地に宮を建立させたことに始まるという。実際にいつ頃からこの地に伊雑宮が存在していたのかと言えは、既に『皇太神宮儀式帳』（八〇四年成立）及び『延喜太神宮式』（九二七年成立）に天照大神の遥宮であると記述されており、八〇四年以前から存在していたことがうかがえる。

また、伊雑宮から歩いて十分ほどのところに境外所管社の佐美長神社があるが、この社も成立は古く、『皇太神宮儀式帳』にその名は登場する。祭神は大歳神、その縁起は稲穂をくわえてきた真名鶴を大歳神として祀つたことに始まる。伊雑宮の周辺、上の郷字上の里には千田の池があり、それは真名鶴がくわえてきた八握穂を元にして水を引き、苗代田とした遺跡だと伝えられている^⑦。祭神の大歳神は正月に来訪する神にして穀物神であり、大歳神の「歳」は稲の成熟する期間を示していて、その名が「穂落としの神」（ホオトシ↓オオトシ）からの転化だとする説もあるように^⑧、穂落とし伝承と関係深い神であると考えられている。

『倭姫命世記』では真名鶴が稲穂を運んできたという伝承を、垂仁天皇二十七年秋のこととして次のように記している。

二十七年戊午秋九月、鳥の鳴く声高く聞えて、昼も夜も止まずして囁し。^{かまびす}

「これ異し^{あや}」と宣ひて、大幡主命と舍人紀麻良と使に差し遣はして、かの鳥の鳴く処を見しめたまふ。罷り行きて見れば、嶋の国伊雑の方上の葦原の中に、稲一基あり。生ひたる本は一基にして、末は千穂に茂れり。かの稲を白き真名鶴^{くは}咋へ持ち廻りつつ鳴きき。此を見頭はすに、その鳥の鳴く声止みき。返事申しき。その時、倭姫命宣はく、「恐し。事問はぬ鳥すら、田を作りて皇太神に奉るものを」と詔ひて、物忌始め給ひて、かの稲を伊佐波登美神をして拔穂に抜かしめて、皇太神の御前に懸^か久真に懸^かけ奉り始めき。則ち、その穂を大幡主の女子乙姫に清酒に作らしめて、御饌^{みけ}に奉り始めき。千税^{ちちから}奉り始むる事、茲^{これ}に因れり。かの稲の生ふる地を千田と号けたまひき。嶋の国伊雑の方上に在り。その処に伊佐波登美の神、宮を造り奉りて、皇太神の摂宮と為す。伊雑宮これなり。かの鶴の真鳥を号けて大歳神と称し、同じ処に祝ひ宛て奉る。また、その神は皇太神の坐します朝熊の河後の葦原の中に、石として坐す。かの神を小朝熊の山の嶺に社を造り奉り、祝ひ宛て坐さしむ。大歳神と称すは是なり。『倭姫命世記』

ここでは、真名鶴がもたらした稲が、一基でも千穂に実る奇跡の稲として語られている。それは『豊後国風土記』総記豊国の起源、白い鳥が餅となり「芋草数千許株」となつて、その花や葉は冬も茂つたという記述を思わせる⁹。千は実数ではなく数が多く豊かなことの総称で、一基でも千穂に実ることとは豊かな実りを象徴している。穂落とし伝承が語っているのは稲の伝来のみならず、この地に稲の豊かな実りがもたらされたことでもあるのだらう。やがては鳥自身が稲魂や豊穰そのものとして語られるようになる。例えば次に挙げる『豊後国風土記』速見郡がその良い例である¹⁰。

田野郡の西南のかたにあり。此の野は廣く大きく、土地沃腴たり。開墾の

便、此の土に比ふものなし。昔者、郡内の百姓、此の野に居りて、多く水田を開きしに、糧に餘りて、畝に宿めき。大きに奢り、已に富みて、餅を作ちて的と為しき。時に、餅、白き鳥と化りて、發ちて南に飛びき。當年の間に、百姓死に絶えて、水田を造らず、遂に荒れ廢てたりき。時より以降、水田に宜しからず。今、田野といふ、斯其の縁なり。

『豊後国風土記』速見郡

富んだ百姓が奢り高ぶつて餅を的としたため、餅は白い鳥となつて飛び去つてしまい、その年のうちに百姓は死に、田も荒れてしまった。稲魂宿る餅は白い鳥であり、白い鳥は稲の精霊でもある。稲を粗末に扱えば、その実りによつて得た富は忽ち消滅してしまう。さらに、これと同工異曲の伝承である『山城国風土記逸文』伊奈利社は、餅から変じた白い鳥が再び稲となつたことを語っている。

風土記に曰はく、伊奈利と稱ふは、秦中家忌寸等が遠つ祖、伊侶具の秦公、稲梁を積みて富み裕ひき。乃ち、餅を用ちて的と為ししかば、白き鳥と化りて飛び翔りて山の峯に居り、伊彌奈利生ひき。遂に社の名となしき。其の苗裔に至り、先の過ちを悔いて、社の木を抜じて、家に殖えて埴み祭りき。今、其の木を殖えて蘇きば福を得、其の木殖えて枯れば福あらず。

『山城国風土記逸文』伊奈利社

「伊彌奈利」（イネナリ）という言葉が示しているように、稲魂の化身である白い鳥は、飛び去つた山頂で再び稲となつた。三重県津市にある弥尼布里（ミネフリ）神社にも、祭神稲降大明神（倉稲魂命）が真名鶴と化してこの地に稲穂を落としたという伝承が伝わっている。稲魂とは各地を点々とまわっていく

来訪神、まさに大歳神のようなものなのだろう。イネナリは「稲生り」であり「稲降り」であり、稲魂も、それによってもたらされる豊穡や富も、決して一所に留まるものではない。それは豊穡が人の意のままにできるものではなく、むしろ人の力を超えたものであり、鳥によってもたらされれば、鳥によって持ち去られもするものであることを示している。

そして稲が白い鳥となつて飛び去つてしまふ餅的伝承は、実は穂落とし伝承の裏返しにほかならない。鳥は自由にこの世界と別の世界とを往還する境界的な生き物で、現実世界とは異なる異界、あるいは不老不死の常世の国、あるいは死者の赴くあの世からの使者である。鳥に象徴されている稲魂は豊穡そのものでもあつて、その豊穡は本来この世界に存在するものではない。豊穡や富は常世の国から鳥によつてもたらされるものであり、常に異界性を秘めたものであつた。

このように、豊穡を約束する奇跡の稲が鳥によつてもたらされたことがこの祭の起源であり、秋の実りを予祝する稲作儀礼であることは明らかである。しかし、先にも述べたように、この祭は稲作農耕民のためにばかり行われているのではない。「竹取神事」の竹が漁業繁昌、海上安全の護符であるように、漁撈民の信仰を集めてもいる。田船の「船」にしても、本来それは海上をいく乗り物である。祭はどこかしらで海と結びついている。

ところで先に挙げた佐美長神社には、佐美長御前神社が合祀されており、その祭神として佐美長御前神が祀られている。イサワ宮、イサナミトミ神、サミナガミサキ神、これらの名にあるイサ・ナミ・サミは、共通して常世へと誘う波の音であり、佐美長の「長」は長いものの全ての総称で、蛇の意であろう¹¹⁾。波に打ち寄せられ、川をさかのぼった蛇が佐美長の意味なのではないか。それを裏付けるように、御田植祭の日には、七匹の鮫が矢湾から川を遡つて伊雑宮の大御田橋まで上がってくるという。この七本鮫は伊雑宮の使いとされてお

り、また俗に龍宮の使いだとも伝えられている¹²⁾。

そのように考えると、佐美長神社の祭神は、本来は大歳神ではなく佐美長神なる在地の神を祀っていたのではないかと思われる。『倭姫命世記』に度々登場する伊佐波登美神も、その在地の神の別名であつたかもしれない。おそらく、波とともにこの浜辺に打ち上げられた蛇が佐美長の神の正体であり、この周辺に龍宮にまつわる伝承が多く残されていることからしても¹³⁾、この神が童宮と関係深い蛇神であつたことは想像に難くない。常世の波寄せる伊佐波の地に佐美長という蛇体の水神がいて、この地に住む人々に海上安全と豊漁を約束していたのではなからうか。

つまり、この稲の穂落とし伝承以前、この地域には水神である佐美長神が祀られており、その時そこにあつた信仰は海上安全、豊漁祈願といった海の信仰であつた。それが「竹取神事」として今なお残滓を留めていて、その竹を持つて帰れば海上安全の護符となるのである。さらに興味深いことに、サシバに真名鶴と一緒に描かれている帆船の帆には、「太一」という文字と青峰山の金の珠である宝珠が描き込まれている。その青峰山は漁師たちにとっては港を識別する「山当て」の山、海上から見たランドマークであり¹⁴⁾、その山頂にある正副寺には、今も祭日に多くの漁師が海上安全と豊漁を願つて訪れる。と同時に、その山は水難事故にあつた死者が帰っていく山でもあるらしい。山頂にありながらそこは海に通じている空間であり、あの世に通じる入り口でもあつた。

そのように船を介して山と海は結ばれ、あちらの異界とこちらの異界の結節点として御田植祭料田は位置している。料田のみが現実空間として浮かび上がってくるかのように、あの世と表裏一体となつた、神話世界と背中合わせの空間として祭の場は出現する。それゆえに、その日料田に植えられる苗は、昔この地に真名鶴がくわえてきた八握穂そのものとして幻想される。現実世界に「神話」が侵入するのである。穂落とし神である大歳神がもたらした稲は、サシバ

に招き寄せられた太陽神によって成長を促される。稲も太陽も、神話的空間としての天上世界から、現実空間のその田に落ちてきた。

そしてその稲は、実は天上から落ちてきたのではないだろう。天と同一空間として幻想されている海上から寄り来たものに違いない。押し寄せる波とともに、船に乗ってそれはこの渚に漂着した。あるいは蛇のように、打ち寄せる波にのってそれは運ばれてきたのではないか。稲は海上はるか彼方、常世の国からもたらされた幸であつたのだ。豊穰というユーは海の彼方のニライカナイからより来るもの、という沖縄のニライカナイ信仰に同じである。海の彼方から鳥によって稲はもたらされたという言い伝えすら沖縄にはあるではないか。鳥は天と地を結ぶものだけではない。海上の彼方とこの地を往還するものでもある。それは船と同じである。神話的な記号からすれば、鳥も船もこの世と異界とを結ぶ使者、表象である。常世の国から鳥によつてもたらされた稲、それは田船に乗つて料田に降り立つたアマテラス自身でもある。「稲は海の彼方から寄りきたとする記憶」は、「稲は天上世界から落ちてきたという神話」に変化していったのである。そのような物語をこの御田植祭の中に見たとしても、それはあながち荒唐無稽なことではあるまい。

備中など中国地方では、太陽を父とし水の霊を母として生まれた田の神「さんばい」は稲鶴姫と呼ばれ、穂落とし伝承と関連があるとされている¹⁵。太陽の光と水があつて稲は初めて成育する。それは記紀神話が繰り返し語り続ける、聖婚のモチーフでもあつた。

例えば太陽の御子ニニギノミコトは水辺で神の来臨を待つヲトメ、コノハナサクヤヒメと出会い、一夜孕みを疑われたコノハナサクヤヒメは、疑いを晴らすべく火中で「ホヽ火ヽ穂」を名に持つ、ホデリノミコト、ホスセリノミコト、ホヲリノミコトを産む。そのホヲリノミコトが海神の娘トヨタマヒメと結ばれてアマツヒコヒコナギサウガヤフキアヘズノミコトは誕生し、その波打ち際に

生まれた御子と海神の娘トヨタマヒメとの間にイツセノミコト、イナヒノミコト(妣の国である海原に行く)、ミケヌノミコト(波の穂をふんで常世の国に渡る)、ワカミケヌノミコト、カムヤマトイハレビコノミコトが生まれ、イハレビコは即位して神武天皇となる。太陽神と水神(海神・龍神)との婚姻によつて誕生する稲の化身としての血は、代々の天皇の中に受け継がれていくのである。さらに時代下つて再びその神話は、サホヒメの悲劇として繰り返される。夫と兄との板ばさみとなったサホヒメは、稲城の燃え盛る火中でホムチワケを出産する。ホムチワケは、稲城に火を放った故か、母の不幸な死による母性の欠落故か、口がきけない皇子として成長し、ある時鵲の鳴く声を聞いて声を発する。ホムチワケに欠けていたのは、鳥即ち稲魂だったのか、ホムチワケは鳥によつて、稲の化身として欠けていたものを補完する。

しかし鳥によつて声を発したといっても、思うように話せるようになったわけではない。ある日の天皇の夢の中に神が出現して、自分を祀れば皇子は話ができるようになる¹⁶と告げる。占いの結果、その神は出雲の神であることがわかり、皇子はその神を拝するために出雲まで赴く。出雲の地で出雲神を祀ったことによつて、皇子はやつと言葉を手に入れる。考えてみればこの出雲は母なる国である。母を慕つて泣いたスサノヲもやはり成人してなお幼児の如き存在として描写され、いつまでたっても口のきけないホムチワケにはそのスサノヲの影がある。スサノヲ、ホムチワケに共通するのは、母性の欠落によつて留められたままの幼児性であり、彼らは出雲に象徴される母性を補うことによつて、一人前の成人男子と成り得るのであつた。

さらにこの話には、興味深い次のような件が続く。

……ここにその御子(ホムチワケ)、一宿肥長比賣と婚ひしましき。故、その美人を竊伺たまへば、蛇なりき。すなはち見畏みて逃げたまひき。ここ

にその肥長比賣患ひて、海原を光して船を追ひ來たりき。：

『古事記』垂仁天皇祭

ホムチワケはヒナガヒメと一夜をともし、その女神が蛇であることを知って驚き逃げる。するとヒナガヒメは海原を照らして船を追いかけてくる。それはさながら、「吾に辱見せつ」と醜い姿を見られたことに憤慨してイザナキを追いかけてきたイザナミのようであり、あるいは娘道成寺の清姫よろしく、逃げる男を追いかける女の情念の化身のようでもある。蛇神ヒナガヒメは嫉妬にかられる女神であるが、それと同時に「海原を光して船を追ひ來た」る、海上を自由自在に移動する水神でもあり、それはまさに「船」のイメージである。ホムチワケとヒナガヒメ、それは日継の御子とその土地の女神の婚姻譚であり、太陽神と水神の婚姻としての物語がここにはある。神話は繰り返されている。そしてこの太陽と水という対構造は、御田植祭とりまく状況の中にも再現されている。アマテラスを祀る伊雜宮と本来はサミナガ神を祀っていたと思われる佐美長神社、「田植え神事」と「竹取神事」という対の物語として、この祭を解釈することもできるだろう。鳥と蛇は稲の伝来を語り、太陽と水は稲の豊穰を約束する。太陽と水、鳥と蛇、天と海、それは結び結ばれ、めぐりめぐって「稲の神話」へと結実する。この祭は太陽神と水神との間に生まれた「稲」を物語っているのである。

御田植祭三つ目の神事は「踊りこみ」、これはいわば神人一体となって豊穰を願う祭の大団円である。神人ともにあることを三時間練り歩くことのうちに確認するのだが、それは神話世界と隣り合った現実を知ることでもある。神話は遠いところにあるのではない。この地域の人々は、この祭の場において、否、祭に続く日常の日々においてさえも神話世界と繋がっていた¹⁶。

「踊りこみ」の最後は、鳥居前での千秋楽と呼ばれる舞の奉納である。その時挨拶をした区長が発したのは、彼らの奉仕をねぎらう「苦勞さま」でも「お疲れさま」でもなく、「おめでとうございます」という言葉であった。その言葉のうちに、この祭の本質を見たように思った。神に奉仕することは仕事でも苦勞でもない。このハレの日にハレの舞台に立ったことはめでたいこと、誇りなのである。時に寄り付いた神とともに田植えをし、時に歌舞でもって神を喜ばせる。それは奉仕であつて奉仕ではなく、神と一体となった奇跡であつた。

祭とは、時代とともに様々に変化を遂げていくものではある。しかし、この祭を見る限りにおいては、祭の本質は失われることなく受け継がれている。神人一体となつて行う田植え神事と歌舞。海の民の信仰も農耕民の豊穣祈願も、その祭の中に融合され、その全てが神話世界をよみがえらせるものとして機能している。祭とは、神話世界を再現することでもあるのだと、あらためて感じずにはいられなかった。

【注】

(1) 伊雜宮は内宮（皇大神宮）別宮で、内宮背後の島路山を越えた志摩市磯部町上之郷にある。伊勢神宮別宮十四社のうち伊勢国外では志摩国の伊雜宮一社のみであり、また神田を持つ唯一の別宮でもある。十社ある内宮別宮の中で、伊雜宮は荒祭宮、月讀宮、瀧原宮に次ぐ順位とされる。伊雜宮を志摩国一宮とする説が一般的である。祭神はアマテラス。

(2) 二地域で当番を務める地区もあるので、九地域であるけれど七年に一度の奉仕となる。

(3) 二番まである「刺鳥差数え唄」は、「穂落とし」伝承と「鳥差し」となっていて、鳥勸請と穂落とし伝承は何らかの関連があるとされている。

(4) 鳥羽市安楽島町にある伊射波神社がその比定地とされている。

- (5) 熊野を出雲国熊野と捉える説もある。
- (6) 『磯部郷土史』磯部郷土史刊行会編 1963
- (7) 大林太良『稻作の神話』弘文堂 1973
- (8) 『磯部町史』磯部町史編纂委員会編 1997
- (9) 『新全集 風土記』(小学館)では冬を「尽」ととり「みな」の意とする。
- (10) 他にも『山城国風土記逸文』鳥部里伝承、『豊後国風土記逸文』餅の的伝承がある。
- (11) サミナガの「サ」は倉田一郎『農と民俗字』(民俗・民芸双書 39) 岩崎美術出版 1969)がいうところの「サの神」かもしれない。倉田は、「サの神」とは穀霊神、雨水の神であり、その正体は蛇であるとする。
- (12) 七本のうち一本は殺されてしまい、今は六本とされる。その鯨は大御田橋からは蟹や蛙に化身して伊雑宮に参詣するともいわれる。またこの日は志摩一円の海女たちは海に入る事を忌み、伊雑宮に参詣する。
- (13) (7) によれば、この地にも浦島伝承が伝わっているらしい。
- (14) 藤田富士夫は『古代の日本文化』(中公新書 1990)の中で、「海民奉拝の霊山の盛行は、山アテ航海による遠隔で広域にわたる航行が盛んであったことを示すものである」とし、山の上にながら海上航海者の目印となつて漁民の信仰をあつめた霊山が、日本海沿岸と関東や紀伊半島に集中していることを指摘している。青峰山もその霊山の一つであるという。
- (15) (11) 倉田一郎論文に同じ。
- (16) 佐美長神社社殿が東面しているのも、(6) によれば、伊雑海口から西に向かつて進んできた猿田彦を迎える為のものだという。社殿東面の由来を神話世界に求めていることがわかる。